

2022 JUA/AUA Academic Exchange Program 参加報告

竹澤 健太郎 (大阪大)

私は4月25日から5月12日の約3週間、埼玉医科大学総合医療センターの竹下英毅先生と共にカリフォルニア州はスタンフォードにあるStanford Hospitalで研修させていただきました。シリコンバレーの中心地であるスタンフォードでは、まずその景気の良さや物価の高さに驚かされました。初日に竹下先生と外食しましたが、お金がもたないことを悟り翌日から自炊生活になりました(竹下先生が料理担当、私は皿洗い担当)。宿は大学近くの小さなワンルームのアパートでしたが家賃が月30万円でした。この物価の高さには現地の人も困っているようで、Stanford Hospitalでは看護師のストライキが行われていました。病院が3年12%の賃上げを提示したのに対し看護師は3年20%の賃上げを要求リストに突入したそうです。看護師がストをすることに驚きましたが、もっと驚いたのは彼らの平均年収が14万ドルと私より高かった事でした。彼らの年収は3年後には16万ドルになります。日本経済がコロナで停滞している間に米国経済はどんどん成長していることに気付かされました。

私たちが担当してくださったのはChung先生でした。非常にフレンドリーな先生で本当に良くしていただきました。腎臓、前立腺癌のロボット手術のエキスパートで、その手術は丁寧で速く、とても勉強になりました。研修で最も印象に残ったのはスタッフの先生のレジデントの先生の指導法でした。レジデントの手術を見学する機会も多かったのですが、スタッフの先生は何かあっても決して怒らず、常にポジティブな言葉で彼らのモチベー

ションを上げるよう指導されていたのは非常に印象的でした。Chung先生になぜ怒らないのか?と質問したら、怒ったら問題になるからだよ、とおっしゃっていましたが、彼らの優しい指導はそのようなネガティブな理由によるものではないと思われました。ある時ラパロの腎摘が行われていたので、なぜダベンチを使わないのか?と聞くと、若い先生にラパロの経験を積ませる必要があるからだよ、とおっしゃってました。またレジデントの学会発表の指導もスタッフの先生が時間をかけて非常に丁寧にされていて、自分もこのような指導者になりたいと思いました。

もう一つ印象的だったのは米国の危機対応能力の高さでした。Stanford Hospitalではコロナを契機に外来をほとんどオンライン診療に変えたそうです。Chung先生は医者も患者も病院に来なくて良いから楽だよ、とおっしゃってました。またコロナで入院ベッドがなくなった時期はRALPが日帰り手術だったそうです。Chung先生はベッドが不要だと毎日手術できるよ、とおっしゃってました。日本がコロナで右往左往している間に米国はコロナに柔軟に対応し発展し続けており、米国の危機対応能力の高さを見せつけられたように感じました。

最後になりましたが本プログラムに参加させていただき本当に貴重な経験を得ることができました。JUA, AUA, およびスポンサーであるNeoTract社の皆様に心より感謝申し上げます。



筆者(左), Chung先生(中央), 竹下先生(右)